

高齢者の個性に基づく自立生活支援のための ケアインタラクション分析

福田 幸大^{†1} 神谷 直輝^{†2} 桐山 伸也^{†3}

概要: 筆者らは高齢者の個性に基づいたケアに着目し、自立生活支援が行われているケアのコミュニケーション技術の蓄積と、介護従事者の気付き促進を促す仕組みの構築を進めている。ケアゴールを用いることで、高齢者の個性に基づいたケアに対する、介護者ごとの違いを表出することが可能となった。異なる介護者の思考プロセスの違いを表出させることで、「その人らしい暮らし」を支えるケアのエビデンスを創出できる見通しを得た。

キーワード: 認知症情報学, コミュニケーション, 自立支援, エビデンスベーストケア

A Care Interaction Analysis based on Elderlies' Characteristics for Independent living support

YUKIHIRO FUKUDA^{†1} NAOKI KAMIYA^{†2} SHINYA KIRIYAMA^{†3}

Abstract: We have been developing a knowledge sharing system to accumulate and improve the care technics for independent living support by focusing on elderlies' characteristics. It is possible to express the difference of thinking process on care based on elderlies' characteristics for each caregiver by using care goal. We got prospects of creating evidence of care to support living how elderly wants.

Keywords: dementia informatics, communication, living support, care interaction,

1. はじめに

近年、少子高齢化が急速に進行し、加齢により発症リスクが高まる認知症の人が急増している。認知症は一旦正常に発達した知的能力が持続的に低下し、複数の認知障害があるために日常生活に支障をきたすようになった状態である。認知症は徘徊や興奮、暴力などの周辺症状が現れる場合があり、認知症の人との関わりやコミュニケーションが社会で大きな課題となっている。

このような行動への対応に苦慮する現場がある一方で、認知症の人が穏やかに、生き生きと暮らすケア現場がある。徘徊・幻覚や妄想・暴力といった行動・心理症状がほとんど見られず、認知症の人の生活の質を向上させているケア現場やケア技法が存在する[1]。このような現場では、認知症の人が個人として尊重され、生きがいや居場所がある状態を作ることで、生き生きとした暮らしを実現している。こうしたケアを提供するには、高齢者の個性を十分に理解していくことが必要だと言われている。

介護従事者は日頃の聞き取りや観察、関わりの中から高齢者の望みや目指す姿を取り出す。それに対して介護従事者が環境や働きかけを工夫し、高齢者の望みや目指す姿に近づく。このようなインタラクションにおいてお互いの目

指す状態の情報共有が行われる。ケアにおける介護従事者と高齢者のインタラクションを分析し、目指す状態への適したケアを表出することで、暗黙的なケアノウハウやスキルを客観化し、コミュニケーション知として蓄積・共有を勧めていくことが必要である。

本稿では、個性に基づいたケアにおける介護者と高齢者のインタラクションを分析した結果について述べる。

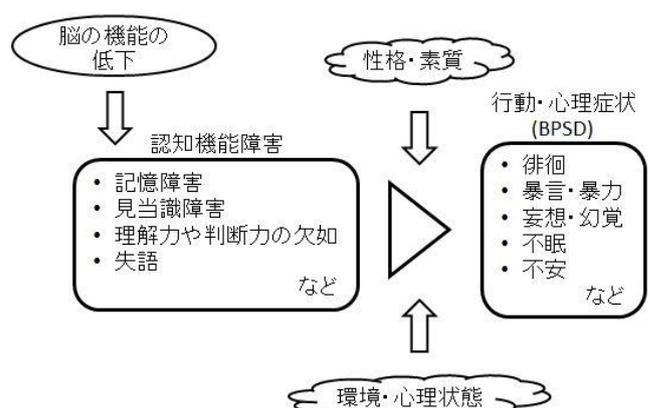


図 1 認知症の症状のメカニズム

^{†1} 静岡大学大学院総合科学技術研究科
Graduate School of Integrated Science and Technology, Shizuoka University

^{†2} 静岡大学創造科学技術大学院

Graduate School of Science and Technology, Shizuoka University
^{†3} 静岡大学大学院情報学領域
College of Informatics, Academic Institute, Shizuoka University

2. ケアを円滑に行う介護・看護現場

2.1 「その人らしい暮らし」を支える認知症ケア現場

筆者らは東京都品川区の「ケアホーム西大井こうほうえん」の協力の下、認知症ケア事例と環境センシングデータの収集を行っている。ケアホーム西大井こうほうえんは介護サービス付き高齢者向け住宅である。入居する高齢者一人ひとりについて、経歴や今後の生活に対する希望を適切に把握し、その人らしく安心して日常の暮らしを送れるよう支援を行い、質の高いケアを提供している。

2017年7、8、10月に訪問し、およそ24時間に渡り、ケア事例の収録と施設内各所の環境センシングを行った。なおデータ収録の対象となる入居者について、本人及び家族に趣旨を説明し、同意を得て実施した。

2.2 認知症ケア事例の収録

今回実施した認知症ケア事例収録の概要を以下に示す。

- 対象ケアスタッフ：10名（男性5名、女性5名）
- ケアの主な内容：
 - 食事介助
 - 口腔ケア
 - 排泄支援
 - 臥床及び離床介助
 - 就寝及び起床支援
 - 歩行支援
- 収録ケアデータ量：合計約60時間分
- 介護記録・生活支援計画書

映像撮影に加え、介護記録・生活支援計画書を取得した。生活支援計画書には、入居者がどのような生活を望んでいるか、それを実現するための関わり方が記入しており、ケアの意図、流れを理解することができる。生活支援計画書における、高齢者のパーソナル情報を表に示す。

表 1: 生活支援計画書の構造

カテゴリ	項目
食に関すること	食事 水分補給 間食
排泄	排泄（排尿） 排泄（排便）
身だしなみ	入浴 浴室・脱衣所移動 洗面 口腔ケア 衣類着脱
移乗・移動等	移乗・移動方法 寝返り・起き上がり・立ち上がり・座位保持
睡眠	睡眠
身体・健康	身体・健康状態・暮らしの中でのリスク 薬の服用
環境	居室・居場所等
社会性	家族対人関係・活動・役割等

情緒	精神面・人生観
----	---------

認知症の人とのより良い関係を築いていくためには、高齢者の個性を十分に理解し、一人ひとりの状態に合わせた生活環境の調節や、コミュニケーションの取り方を工夫することが重要である。表1に示した生活支援計画書の構造を用いて事例に対する知を収集することで、将来的には知識表現へと応用できると考えられる。

2.3 高齢者の個性に基づいたケア

ケアホームこうほうえんでは、入居する高齢者一人ひとりについて、生活支援計画書や介護記録を元に、その人の個性に沿ったケアを行っている。しかし介護初任者はベテランスタッフに比べ、生活支援計画書や入居者の理解度が異なり、ベテランスタッフのケアノウハウをうまく学習できていない状況がある。ベテランスタッフと初任者ケアの違いをお互いが理解し、知識を共有することが必要である。

介護のスキル・ノウハウ共有に向けて、介護者が入居者の望みを取り出し望みに向けたケアを実施し、ケアによって入居者の望みに近づく、といった個性に基づいた介護者と入居者のインタラクションを分析し、このようなケアインタラクションにおけるケアスキルの表出、蓄積・共有を進める。

3. 実環境における認知症ケア事例と環境センシングデータの収集

3.1 コミュニケーション知の構築に向けて

介護現場において、介護のノウハウやスキルは口伝による伝承が一般的であった。筆者らは介護施設における事例映像の撮影や、生活記録、センサデータを用いて、ケアの分析結果を介護従事者らと議論することで、どうしてそのケアを行ったのか、ケアに対する行動の意図を意味づけし、知を表出する過程を繰り返し実施してきた。しかし、個人の背景や性格に関する知識を深めた上で個別に設定されたケアが行われているため、ノウハウやスキル（コミュニケーション知）の多くが形式知化されておらず、ベテランから初任者へスキルの共有が困難である。そこで筆者らは、高齢者の個性に基づいたケアインタラクションの分析によるコミュニケーション知の表出と、介護従事者らに気付きを与える学習環境の構築を進めている。

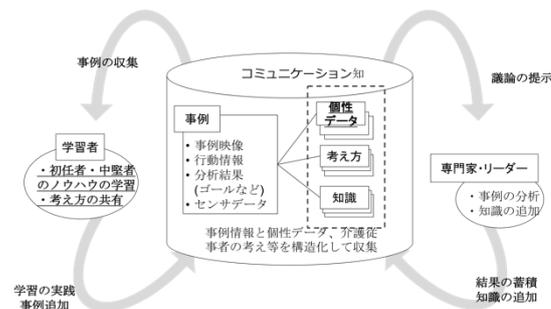


図 2 コミュニケーション知の蓄積・共有

3.2 コミュニケーション知の構造化に向けた予備検討

ケアの意図は高齢者の個性や特性・その時やその場の状況状態に応じて柔軟かつ多様に変化する。そのため、ケアの考え方や思想の表現のさらなる高度化のためには、高齢者のこうした個性に対して介護従事者の意図を関連付けて収集・表現を行っていく必要がある。

今回予備検討として、構造に必要な項目として施設で用いられる、生活支援計画書におけるパーソナル情報の項目を用い、高齢者の個性や介護従事者の意図の表現に必要な情報をまとめた。高齢者の個性に基づいたケアに対する気付きの収集のため事例検討会を行った。事例検討会の概要を下記に示す。

- 対象者：こうほうえんに勤務する介護従事者 6 名 (上級者)
- 内容：
 - 事例を視聴し、気づいた点 (周囲の状況・入居者に関して・スタッフに関して) を個人で記入
- 事例概要：
 - 高齢者 A. 90 代女性. 洗面台ではなく、居室のリビングで口腔ケアを行う場面
 - 高齢者 B. 80 代女性. 生活共同室を行き来する車椅子に乗る高齢者を誘導する場面

事例を場面に対しての自由な記述をしてもらい、得られた考えを以下に示す。

表 2: 介護従事者の事例場面 1 における気付き

回答者	周囲の状況	入居者	スタッフ
1	暗い環境で行うと、ポイントを見落とすため明るいところで行うことが大事	耳は少し遠い方だが、スタッフの笑顔を見て安心されている様子	ポジティブな声掛けを行うことで次も頑張ろうと思ってくたさるように接している
2	明るさ・環境を考えている	明るさ・ほめてもらうこと、うれしい	状況を伝え理解してもらおう・できていることを伝えて頑張ってもらおう
3	自然光のある場所で⇒洗面台にこだわらない	意識 無意識か	褒める (距離と声色がいい)・先に磨いていただいて、仕上げみがきに入っている (ご本人のセルフケア能力の維持)

表 3: 介護従事者の事例場面 2 における気付き

回答者	周囲の状況	入居者	どうしてこのケアを行うのか
1	知っている人がいる環境であると、自ら話そうとされていた、他の利用者と交流を持つ	車椅子の動かし方で変わった声掛けで変わる	ポジティブな声掛けとネガティブな声掛けで利用者の方の様子に変化あり

2	常にいろいろな音がして落ち着かない	一方的に案内されているだけ	押すスピードが人によって違う・肩に手を添えて押していた
---	-------------------	---------------	-----------------------------

事例に対して、「耳は少し遠い方」「セルフケア能力の維持」「肩に手を添えて」のようなパーソナル情報における「身だしなみ」「社会性」「身体・健康」のように、介護従事者の気付きと施設の支援計画書に於けるパーソナル情報との関連があることがわかった。

4. 高齢者の個性に基づいた認知症の人の生活場面の状況理解

4.1 ケアゴールを用いたケア提供者の思考の表現

認知症の人の状態と、それに対する介護従事者のケアの意図の関連を紐付けて表現することで主観的なケアの考え方のプロセスの客観化が促進される。また、客観的なケアの考え方のプロセスを可視化することにより、どのような思考のもとそのケアを行うのか、なぜそのケアを行ったのかが表出され、初任者・中堅者や、考え方の共有が促進される。こうした背景から、介護者の行動と行動を実行する要因をゴールと具体的なサブゴールにプランニングして表現するゴールネットワーク[3][4]の構造に基づいて、ケアインタラクションの分析を行った。

高齢者の望まれる生活をゴールとして考えた時、そこから設定される細分化された目標をサブゴールとして表現する。図 2 に実際の行動に対するゴールの記述例を示す。

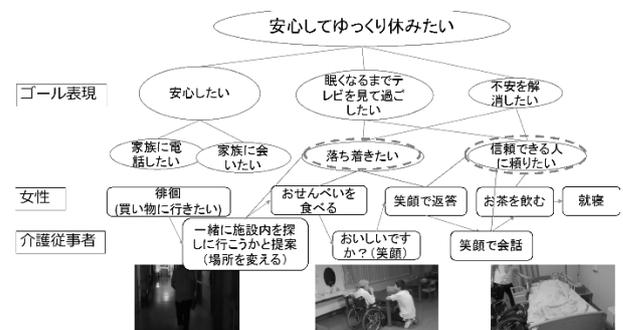


図 2 不安を解消する働きかけのゴール分析

この事例は、高齢者が夜間外に買い物に行きたいと、施設の居室から廊下へ出て、徘徊していた場面である。この入居者は普段から不安になりやすく、生活支援書において、深夜帯では安心してゆっくり休みたいという生活を望んでいる。このようなトップゴールに対して、スタッフは廊下から生活共同室という広い場所へ移動し、そこでお茶やお菓子を食べながらゆっくりと会話を行うことで、サブゴールとなる「落ち着きたい」「信頼できる人に頼りたい」を満たすことで、就寝してもらうことができた。

このようにゴールに基づいたケアの問題解決プロセスの表現を行うことで、認知症の人の状態に応じた柔軟なケア

の意図の違いを比較することが可能である。またゴールを設定することで、扱う情報の種類と構造を決められ、現状との差分が記述できるようになり、複数のゴールを設定しアプローチを絞り込むことで、ケアプランを立てることができるようになる。

4.2 個性に着目したケアインタラクション分析による自立生活支援に向けた認知症ケアスキルの可視化

4.1 節よりゴール表現を用いて認知症の人の状態に応じた柔軟なケアの意図の違いを比較することが可能であることがわかった。ケアは個人の背景や性格に関する知識を深めた上で個別に設定されるため、ベテランから初任者へのスキル共有が難しい。初任者は、ケアの目的がクリアに分かっていないため、前の状態（前日や、昼間、夜間の様子）からつなげて考えておらず、ケアの事前準備や入居者の行動予測ができておらず、どう動けばいいかわからない。そのためケアにおいて、介護従事者の思考プロセスを表現することで、初任者にノウハウの学びの支援を行うことが出来る。

ケアにおけるスキルの差を、高齢者の個性の理解度から明らかにするために、上級者のケアに着目し分析を行った。ケア事例として高齢者が車椅子から立つ場面と、口腔ケアの場面を用い、実際の介護事例に対しての行動と、高齢者の個性を生活支援書に基づいて記述し、ゴール表現を用いて思考プロセスを構造的に表現した。

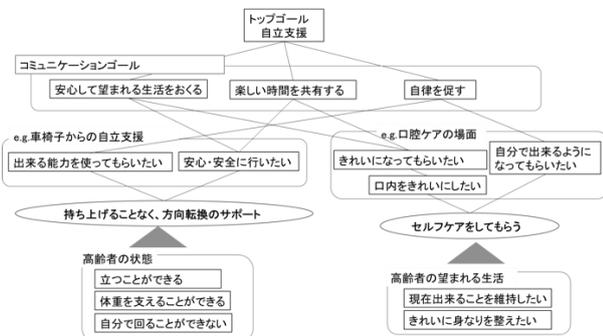


図3 高齢者の望む姿に基づくケアの思考プロセス

介護上級者の行動に対して思考プロセスの可視化を行った。上級者は高齢者の状態・生活記録（立つこと・体を支えること等）から行為の出来る範囲を把握し、中長期的に自分で行為を行える・能力を維持できるようなトップゴールの自立生活支援を満たすサブゴールを設定している。また、高齢者の望まれる生活を満たすサブゴールの設定を行い、生き生きとした暮らしを実現していることがわかった。

今後初任者との違いを表出化し、学習環境デザインに活用することで学びの促進につながると考えられる。

4.3 分析結果の考察

4.2 節の事例検討結果から、映像に対してどうしてその

ケアを行うのか、ケアに対する行動意図を表現した。表1の生活支援計画書におけるパーソナル情報を用いることで可能となった点について以下に示す。

- 高齢者の個性に応じたケアを、高齢者の状態や望まれる生活と紐づけて示すことが可能となった
- それにより、ケアの考え方のプロセスを構造的にコミュニケーション知として蓄積していくことが可能になった

認知症ケア現場におけるケアインタラクションの分析のため、高齢者のパーソナル情報と介護従事者の思考プロセスを結びつけて表現し、上級者と初任者との違いを表出することが出来る見通しを得た。また、ゴール表現を用いて認知症の人と介護者の行動を紐付けて表現・蓄積を進めていくことで、認知症ケアにおける新たな知見の発見や、介護者の気づきの支援を行うことができることがわかった。ケアの高度化に向けて、パーソナル情報・個性に基づいたケアに対して蓄積・表現を行うことで、介護コミュニケーション知の深化成長につなげていく。

5. おわりに

本稿では、その人らしい暮らしを支援する認知症ケア現場におけるケアインタラクションを分析し、高齢者の個性に基づいたケアの思考プロセスを表現した。上級者における視点や思考プロセスの表出をもとに、介護初任者との違いを学習環境デザインに活用し、学びや気づきの促進につなげていく。また、介護従事者の行動と生活環境と技術からコミュニケーション状況を分析することで、ケアスタッフの包括的なコミュニケーションと高齢者の暮らし・状態を結びつけた状況理解につながることが期待される。

今後は、同様の環境でさらなるデータ収集や事例場面を増やし、分析結果について専門家の意見を求め、ケアスキルの学習環境を構築し、認知症ケア高度化に繋がる知識の集約や、エビデンスベースケアの実現を目指す。

謝辞 現場でのデータ収集に多大な御協力をいただいた、ケアホーム西大井こうほうえんスタッフの皆様、並びに御入居者の皆様に深謝する。

参考文献

- [1] 本田美和子, イブ・ジネスト, ロゼット・マレスコッティ. ユマニチュード入門. 医学書院, 2014.
- [2] 鈴木夏也, 柴田織江, 石川翔吾, 加藤忠相, 竹林洋一: 映像を用いたチーム介護コミュニケーション分析基盤の開発, 2016年度人工知能学会全国大会(2016)
- [3] Marvin Minsky: A Framework for Representing Knowledge(1974)
- [4] Marvin. Minsky, "THE EMOTION MACHINE," SIMON & SCHUSTER PAPERBACKS, 2006.
- [5] 安西祐一郎, "情報共有によるインタラクションの理論. 認知科学誌, 2017